

大内クリニック 特別治療室3——サンプル——

特殊性癖・閲覧注意

真性包茎化・陰囊陰茎一体化手術・巨根・人体改造・包茎内水圧洗浄・恥垢舐め・前立腺摘出・陰囊への錘埋め込み手術・排泄等（順不同）

入院処置要望書

一、陰囊陰茎一体化手術

二、退院後の包皮内洗浄・射精介助（月一回）

計画期間一週間。

依頼人・速水 和孝（三十三）

患者・速水 優也（二十二）

「先生、この要望書なんです」

「うん」

渡された書類に目を落とす。それは来週から入院予定の患者の物だった。

「陰囊陰茎一体化手術ってどういうことですか」

「ああ、これはね」

速水より依頼を受けた手術は陰囊と陰茎の一体化だ。陰茎を陰囊に縫い付けて癒着させる。そう言うとき山は瞠目した。

「え、くつつきます？」

「普通にはくつつかないけどね」

例えば二本の指をずっと括り付けていたとしても、関節が固まることはあっても指同士が癒着するということはない。

「ペニスと陰囊の、それぞれ皮膚の一部を切除して肉同士を合わせるんだよ」

「ああ……」

それならくつつく、と理解したのだろう。そして理解したことによって眉を顰めている。きつとどうしてそんなことを、と思っているに違いない。けれどそんな気持ちを抱えたまま患者に会えば不安を与えてしまうことになる。しかし今回の場合、口で言うより本人たちに会わせた方がいいようにも思えた。

「どうやら理由があるようだよ」

「理由？」

「まあ、それは当日に」

※ ※ ※

「失礼します。医師の大内です」

「看護師の狭山です。宜しくお願い致します」

入室してきた二人は清潔感のある男性だった。速水が立ち上がったので、優也も急いで腰を上げる。

「速水です。宜しく願います」

「……優也です」

胸が痛い。怖い。緊張している。普段から風邪なんて引かないし、病院なんてほとんど来たことがないのだ。

「どうぞお座りください」

速水を見ると頷かれた。座っていいのだ、と判断して腰を下ろす。

「では今日の手術についてご説明致します」

話し始めたのは大内と名乗った医者だった。

「まず、陰茎と陰囊の一体化ということで、それぞれ皮膚の一部を切開してから縫合します。サイズによつて術後の見た目は変わりますが……確認させてくれるかな」

「えっ」

書類と、それから速水を見ながら進められていた説明。なのに急にこちらを向かれて声に詰まる。

「優也。脱ぎなさい」

「っ……はい……」

速水の言葉は絶対だ。逆らうことは許されない。立ち上がり、ズボンと下着を一緒に下ろす。

「先生、ご覧の通り、優也のペニスは平均より大きいものです」

そう言つて速水がペニスに触れた。それだけでピクリとペニスが疼いてしまう。

「そうですね……一般的に巨根と言われる大きさですね」

医師も目の前に来て膝をついた。至近距離からペニスを眺められている。

「ええ。そして……この通り、すぐに感じて勃起してしまうんです」

「感じやすいんですね。それとも単にいやらしいことが好きな淫乱なのかな」

最後の言葉は優也に向けられていた。見つめていたペニスから顔を上げ、医師が優也の顔を見上げている。

(淫乱……)

速水には何度もそう呼ばれた。勃起の度に、「いやらしい」「淫乱」と言われ続けた。速水が初めての相手なので普通の人がどれほどなのかは分からない。けれど経験豊富な速水がそう言うのだから、きつと優也は人よりいやらしくて淫乱なのだと思う。

「でも、せっかく立派なペニスなのに宜しいんですか」

「はい。いつでもどこでも勃起してしまうんです。その度にズボンの前立てを隠さねばなりません。それは少し困るのです」

困る——それを言ったのは優也からだ。速水と出掛ける度に何度も勃起した。買い物へ行っても、

食事に行っても。速水の目を見たり、声を聞くだけでいやらしい気分になってしまうのだ。何度も何度も執拗に愛された夜のことを思い出してしまつて。

でも当然人の目が気になった。それに一人でいても、暇さえあれば速水を思い出してしまつてその度に股間を硬くした。オナニーをしたり、速水に射精させてもらった後でも変わらず勃起してしまつて苦しくて堪らなかったのだ。それで、相談した。

『和孝さん……』

『ん？』

その日も速水の仕事の後、外で待ち合わせて外食をしていた。個室の焼肉。和孝はいつも、優也の勃起を気にして個室にしてくれているのだ。でもその外食費だっていつも速水が出してくれる。それが申し訳なかった。優也は若いせいか食欲も旺盛だし、控えめにしても遠慮するなと速水が頼んでくれているのだ。でも、完全個室の店はそれなりに高い。自分で出すからと言っても気にするなと言われてしまつて、でも個室なのは自分が淫乱なせいで——悩みに悩んで、それからようやく口にした。

『勃起できなくなりたい』

『優也……どうして？』

『だって……』

さすがに金銭的なことを気にしているとは言えない。気にするなと言わせしまうと分かっている。

『……家ではいいけど、外で勃起しても射精できなくて苦しいから』

『ああ……そうか。そうだな……せつかく勃起したのにそのまま萎えるのを待つだけというのもつらいな』
速水は親身になって考えてくれた。優しいのだ。セックスは激しいけれど、それだって愛されているが故だと思う。たくさん求められて嫌な気はしない。

『貞操帯をつけようか』

『貞操帯？』

『聞いたことないか。プラスチックや金属でできているんだが、それをつけると勃起できなくなるんだ』
そんなものがあるのか、と目から鱗だった。早速帰宅後に速水のパソコンで貞操帯を見せてもらい、口コミまで念入りに読んだ——けれど。

『和孝さん、ごめんなさい』

『気に入らないかな』

『あの、気に入らないっていうか、きつそうで』

ペニスのサイズが大きい。もちろんそれに見合ったサイズの貞操帯があることもきちんと速水は調べてくれた。けれど普段から楽な状態の——家ではいつも下衣を身に着けることを許されていない——ペニスを固定するというのが窮屈に思ってしまったのだ。

『……縛られてしまうのは嫌かな』

『うん……』

一緒に住むようになる前から、速水という間は大抵裸だった。でもそれはベッドにいる時間が長かったからそうだっただけのようなものだったのだけれど、一緒に住むようになってからはきちんと言葉で命じられていた。

『服を着てはいけないよ』

『え？』

『冬は風邪を引いてしまうから、上衣は着て構わない。けれど下着やズボンは穿いてはいけないよ。いつでもペニスが見えるようにしておくんだ』

『恥ずかしい……』

『すぐに慣れるよ。大丈夫』

『でも……』

トイレの後はどうしたらいいのか。だって汚い。でもそれも速水は考えていたようだった。

『トイレには洗浄がついてるから、うんちをしたら洗いなさい。おしっこときはよく振って、それからトイレットペーパーで拭けばいいよ』

『でも……』

それまで下着はボクサー派だった。すっかり場所に収まるのが落ち着いたので。けれどそれを突然ブラブラさせたまま歩くなんて。

『嫌ならかまわないよ。でも俺はせっかく一緒に住めるんだから、家にいる間はずっと優也のペニスを見ていたいな』

『……ずっと？』

『ああ。ずっと。疲れて帰って来ても、可哀想なペニスを見たら元気になる』

『可哀想？ 寒そうってこと？』

みすぼらしい見た目ではないと思う。それにこれまで可哀想と言われたことは一度もなかった。

『可哀想だな、と思ったんだよ。こんなに大きくて、女が喜びそうな大きさなのに……生涯使われることがないんだと思ったら』

その言葉が決定的だった——のかは分からない。けれど可哀想と言われて嬉しかったのは事実だ。裸で過ごせばいつでも可哀想なペニスと呼んでももらえるのかもしれない。可哀想というのはつまり、使われないうからという理由によるもので、ということは速水は生涯優也と別れるつもりがないということだ、と思ったのだ。

それからはずっとブラブラ自由にさせて過ごした。だからどうしても貞操帯には抵抗があった。

『じゃあ、貞操帯以外で勃起しなくなる方法を探しておくよ』

『ほんと？ 嬉しい。ありがとう』

そして提示された案。それが陰嚢陰莖一体化手術だった。聞いたときは当然言葉を失った。ペニスと陰嚢を縫い付けてしまうなんて、と思った。けれど速水が忙しい中調べ、そして病院にも問い合わせ説明を聞いてくれていたと知ったら嫌だなんて思えなかった。言えない、じゃない。嫌だと思えなかったのだ。むしろ優也の悩み——しかも人によってはきつとくだらないと言いついて捨てられてしまうようなもの——にしっかりと耳を傾け、時間を割いて解決方法を探してくれたことに愛情を感じた。

~~~~~

亀頭はにゅるんとホールに埋まった。それは信じられないほどの快感だった。

「やだっ、怖いッ」

「怖くないよ。もつと最後まで腰を進めなさい」

「や、怖いっ、おちんちん食べられちゃうっ！」

機械でもないし、当然生き物でもない。それは分かっているのに、吸いつくような感触にまるで食べられてしまうのではないかという錯覚に陥る。

「大丈夫、これが男の本当の性感なんだよ。気持ちいいだろう」

「あ……そうなの……？」

「そうだよ。まあ、優也の中はこんな玩具とは比べ物にならないが。それでも偽物にしてはよくできている」

「あっ……」

速水に女との経験があることは知っている。でもそれをこうして言葉にされたことはなかった。悲しい、と思いながらも興奮する。そして女を知った上で優也を選んでくれたという優越感。

「優也が気持ち良くなれる最高の穴を探したんだ」

「あ……そう……なの？」

会話を意識を集中させてしまうと呆気なく射精してしまいそうだ。怖い。

「そうだよ。当然だろう。だって優也のたった一度きりの経験なんだから。大事な思い出だよ。この玩具もちゃんとしてっおこうな」

「んっ」

嬉しい。そんな大事に思っていてくれたなんて。

「手術の後も、この快感を思い出してつらくなることもあるかもしれない。そんなときはこれをおちんちんに擦りつけて慰めなさい」

「あっ……入らないのに……？」

「そう。入らないから余計に苦しくなってしまうかもしれない。それでもだよ。手術の直前にこれを使っただと思えば、自然と手術の理由も思い出せるだろう」

「あ……」

「言ってごらん。どうして優也はおちんちんを手術するのかな」

「んっ……すぐに勃起しちゃうからっ」

早く気持ち良くなりたい。射精したい。

「そうだよ。いつでもどこでも勃起してしまういやらしいおちんちんを、今から先生に治してもらうんだ」

「んっ」

「だから、これが最後だ。楽しみなさい」

尻を優しく叩かれた。その振動だけでも感じてしまう。でももつと強い刺激がほしい。

「腰を振って。前後に動かして、おちんちんを抜き差しするんだ」

「んっ」

まだ亀頭しか入れていなかったのでゆっくりと奥に押し込む。ぬるぬるの中が、吸いつくような感触で

締め付ける。

「ああああっ！」

すごい。女の中というのはこんなに気持ちいいものなのか。

「気持ちいいだろう」

「うんっ、すごいっ、すごいのっ」

もっこの快感を味わいたい。さっきまでは早く射精したくて堪らなかったのに今は射精したくない。もっとなんと長くこの気持ちいい中にいたい。このままずっと。

「ほら、腰を動かして」

「やだあ……」

「優也。これは女の穴だよ。優也だけが気持ち良くなっていいのかな」

「あ……」

「優也は俺が動かず、一人で優也の感触を楽しんでも寂しくないかな」

「やだあっ」

速水はいつでもたくさんイかせてくれる。自分の快感は後回しで、何度も何度も、何も出なくなるまで射精させてくれる。そしてようやく自分の快感を求め始めるのだ。一体どれほど我慢させてしまっていたのだろう。

もし本当に優也の中がこれほど気持ちいいのなら、きついつでも入っていたいだろうに。

「ほら、じゃあ腰を振って、中を擦ってあげなさい」

「んっ」

泣く泣く腰を引く。そして押し込める。

「ああああっ！」

気持ちいい。良すぎて動けない。だって動いたら出てしまう。まだ出したくない。もっと気持ち良くになりたい。

「こら。止まっではいけないよ。ちゃんと動かないと」

「だって出ちゃうっ」

「ダメだよ。まだ出さずに穴を満足させてやりなさい」

「うう……」

つらい。けれど速水が言うのだからそうしなければ。

再び腰を引き、また押し込む。でも快感が強すぎて上手に動くことができない。それにペニス自体が少し曲がっているせいで押し込めるときに抜けそうになってしまう。

「優也。もっとなんとか動くんだよ」

「はい……」

もうダメだ。イってしまう。すごく気持ち良くてこのままこうしていいたいけれど、諦めないと。

けれど早く動こうと思っても動けなかった。慣れない動きに腰がぎくしゃくしてしまう。

「……まあ初めてだからな。それにもう今後二度とこうして腰を振ることはないから動きを覚えようとはしなくていいよ」

「んっ」

そうだ、もうこれで終わりなのだ。いったら終わり。もう二度と気持ち良くはなれない。

(やだ……)

でも、それは自分で決めたことだ。それに速水が探してくれた方法。だから、いい。

「優也、仰向けに寝転びなさい」

「はい」

いつまでも上手に動けなかったからだろうか。体勢を変えて横になる。

「騎乗位だよ。優也とはしたことがないが、聞いたことくらいはあるだろう」

~~~~~

「患部を見ますよ」

「はい」

(怖い……)

寝転んでいるので起き上がらなければ患部は見えない。けれど怖い。ガーゼがくっついていたらどうしようとか、痛くなったらどうしようとか。

「オムツを外すね」

オムツ——オムツだったのか。それすらも知らなかった。

「ガーゼを剥がすよ。大丈夫、痛くないよ」

本当に痛くなかった。よく傷薬が渴いて患部にくっついてしまうようなイメージがあっただけだ。

「……うん、いい感じ。でもまだ腫れてるから、今日はシャワーはなし。あとで温かいタオルで身体を拭こうね」

「はい」

無事に終わったことにほっと息を吐き、速水に隣に寝転んでもらう。

「頑張ったよ」

「うん、偉かったな。頑張った。それにおちんちん、すごく可愛くなっていたよ」

「見たの？」

手術直後だ。まだ血もついているだろうし、きつと真っ赤に腫れているだろう。転んで擦り剥いただけでも周りは赤く腫れるのに、切って縫ったなんてどれほど腫れ上がっているのか。なのに、ちゃんと見てくれた。嬉しい。

「もちろん。優也が頑張ったところを俺が見ないでどうする」

「ふふ……どうだった？」

「可愛かった。おちんちんの先っぽは完全に隠れてたよ。皮がちゃんと優也の敏感なところを隠してた」

「よかった……」

恐らく、敏感過ぎたのもいけなかったのだ。下着に触れてしまうだけで感じてしまっていたから。それと大好きな速水のことを想像してしまって興奮が掛け算になっていたのだ。でもこれで、もう好きなだけ

速水のことを考えることができる。

「まだ腫れてたけど、すぐに良くなるよ。うんちはそのままでもいいから」

「え、オムツに？」

「そうだよ。もちろん俺が替えるから恥ずかしくないよ」

「恥ずかしいよ」

速水の前で排泄なんてしたことがない。なのにいきなり排便なんて。しかもオムツ。それを替えられてしまう。

「ん？ 今はカテールだけど、これからはおしっこだってオムツにするんだよ。もう立っておしっこはできないから」

「え？」

知らなかった。今まで通り立ちションできると思っていた。それに、立ってできないにしても座ってならできる——はずと思うのに、どうしてオムツに繋がるのが分からなかった。

「座っておしっこするのも可愛いけど、まずは練習しないといけないよ。それに先っぽがタマタマにくっついてるからどうしてもタマタマを汚してしまう」

「あ、そっか……」

二つの陰嚢。その間にペニスが縫い付けられている。陰嚢の袋は柔らかいし、恐らく形からして、ペニスは陰嚢にめり込むように縫われているのだろう。そうすると陰嚢を汚さずに排泄することはできなさそうだ。

「それに、すっかり傷が治るまでは見たり触ったりするのは怖いだろう。だから俺が全部するよ」

「ありがとう……」

まだ頭が回っていないのだろうか。そんなことにも気付かなかった。確かにトイレもお風呂も自分のそこを見なければならなくなる。でもまだ怖い。

「少なくとも皮膚が普通の状態になるまでは俺がするから。だから気にせずうんちもオムツにしような」

「うん……ありがとう。お願いします」

嫌って言わなくて偉いな、と速水は頭を撫でてくれた。恥ずかしいけれど、グロい陰部を見るのは耐えられそうにない。

「お腹は空かないか？ そろそろ飯が来ると思うけど、何か買ってこようか」

~~~~~

「じゃあおちんちんの洗浄をするね」

「はい。お願いします」

窄まった皮。その中を掃除してもらうと亀頭が刺激されてしまい、家だと甘えからかどうしても耐えられなくなってしまうのだ。でもここなら痛くても苦しくても耐えるしかない状況になる。

検診台の前の壁に設置されたモニター。そこには陰部が大写しになっている。

「ちよっと亀頭出せるかな……無理かな」



モニターの中ではペニスの皮が医師の手によって引っ張られている。けれどしっかりと縫合されたそこは全く剥けない。それでもちよっとマッサージをするように揉まれて、それから細い筒が皮の中に挿入された。

「出して」

「はい」

狭山が答え、ボタンを押した。

「ああああああああああ！」

小さな包皮輪の間から水が噴き出す。包皮内に入れられた筒から水が勢いよく噴き出し、それが溢れ出ているのだ。

そこは普段、綿棒でくるくるされるだけで悶絶するほど敏感だ。しかもずっと包皮に守られていて、刺激を忘れてしまった亀頭。そこを痛いほどの水圧で洗われていく。

「つらいね、ごめんね」

シャーという水音の中に聞こえる医師の声。謝るくらいならもうやめて、と思うけれどそんな言葉さえもう発することはできない。

「やああああ！！！」

亀頭が挟られるような水圧。痛い。でも当然医療用なので怪我をすることはない。

「ああああああああああ！！！」

なんとか逃げ出そうと、身体は勝手にもがき出す。もう頭がおかしくなる。ここが病院だということもすっかり忘れて逃げようとする。

でも当然、縛られた身体は動くことはできない。

「ごめんね」

「やああああ！！！！」

激痛。快感。激痛。快感。気持ちいいのに痛い。痛いの気持ちいい——いや、痛みが気持ちいい。

「ああああああああああああ！！！」

イきたい。イク。なのにイけない。水を止めて扱いてほしい。でも今は洗浄の時間だ。

「もう少しね」

~~~~~

「優也、おちんちんとタマタマ、もう一度手術してもらおうね」

「……あ……」

驚く様子はなかった。やはり話を聞いていたのだろう。

「優也くん、今度は前立腺を取るよ。それからタマタマに錘を入れて、もっとタマタマを重くしよう。そうしたら今より重くなって勃起できなくなるから」

「……はい……」

「優也、夕方には手術してくださいさそうだよ。そしたら明日には退院できるから」

「……ほんと？」

すっかりしおらしくなってしまった。元々生意気なタイプではないけれど、恐らくこの様子こそ速水の求めていたものなのだろう。速水の口調も以前よりかなり甘く柔らかい。

「本当だよ。俺もこのまま一緒にいるから。またちよっとつらいけれど頑張ろうね」

「うん……」

可愛らしい。これからどんどん陰部を改造されていくというのに。

「……先生……僕のおちんちん、お願いします」

「はい。じゃあ頑張ろうね。またあとで来るからね」

「はい」

皮は陰嚢に縫合され、徐々にペニスは小さくなっていく。先端は皮の空洞ができたような状態になるだろう。当然剥けもしないのでこれからも洗浄は必要になる。それに前立腺を摘出してしまうことで前立腺への刺激に感じることはでなくなるし、タマの重みは苦しいほどだろう。だから、余計に射精から遠ざかる。それでも今の包皮輪が裂けるかもしれないという恐怖や痛みに比べたらマシ——なのか。単に正常な判断ができない状態になっているのか。

どちらでもいい。本人たちの希望なのだ。こちらはその希望を叶えるだけ。

（楽しみだ）

「あ、狭山」

廊下を歩く狭山を引き止める。

「はい」

「これ、夕方から」

「あ……分かりました」

入院処置要望書

一．前立腺摘出手術

二．陰嚢内錘埋め込み手術

計画期間 一日

依頼人・速水 和孝（三十三）

患者・速水 優也（二十二）

~~~~~

『でもね、優也。おうちで勃起がづらいからって、タマタマを虐めてもいいのかな』

『ダメ……です』

『そうだよね。タマタマ、とても怖くて痛い手術に頑張って耐えたのに、可哀想だよ』

『うん……』

もう一度見せて、と速水は言った。今度は自分でオムツを脱いで、ソファに座る速水の前に立つ。  
『見て』

自分で陰囊を掬って速水に差し出す。歪な陰部。陰囊なのに、ペニスがくつついている。

『とても可愛い。こんな可愛いおちんちん、世界中どこを探しても優也しか持っていないと思うよ』  
『んっ』

可愛い、と言いながらの口付け。先端は吸われ、ぺろりと舐められてしまう。

『ダメ、汚いよ』

『汚くないよ』

『だって、おしっこ……』

今オムツは汚れていないけれど、それでもまだシャワーを浴びていない。浴びていたとしても真性包茎状態で縫われてしまってるそこは剥くことができないので内部にはびつしり汚れを溜めたままだ。

『汚くない。恥垢も全て、優也の身体から出た一部でしょう。汚くないよ』

そう言っただけは小さな先端の穴に舌をねじ込んだ。

『ああああ！』

想像を絶する快感。ペニスはすぐに勃起し、そして痛みを訴えた。

『痛っ！ 痛っ！』

『うん、勃起しようとしてる。タマタマの重さなんて気にならないのかな』

おちんちん、大きいから力持ちなのかもしれないね、と速水が笑う。大きいと言っても速水の方が大きいのに。

『やああ！ 痛っ！』

速水が陰囊を揉む。そして痛いと言っているのにまた先端に舌を這わせた。少し離れたところから舌を伸ばし、窄まった先端をチロチロと舌で擦る。視覚的にも感触的にも気が遠くなるほどの快感だった。

『あああつ、ダメっ、だめえつ、もう許してっ』

苦しい。痛い。なのに萎えない。こんなに痛いの。でもこのままでは皮が裂けてしまう。

『やああつ！ 切れちゃうっ！ 裂けちゃうううう！』

痛い痛い痛い。でも速水は全く聞いてくれない。だからと腰を引こうとしても、急所は速水の手の中にある。

『やあああああ！』

胸を仰け反らせ、必死に快感を逃がす。でも逃げない。欲望を溜め込んだ陰囊は嬉しそうにせり上がる。

『……タマタマ射精したいって』

『したいっ！ したいけど痛っ！』

『うん……痛そう。こんな小さな出口ではどうやっても出て来れないのに、そのことをまだおちんちんは気付いてないのかもしれないな』

『やあああ！』

なんていやらしい説明だろう。

『このまま……このままにしたらさ、おちんちん、ここから出られないって覚えるんじゃないかな』

『無理っ！ 無理いっ！』

例えばペニスに脳があれば覚えるのかもしれない。けれどそんなものはないし、これ以上勃起できないということは本体である優也の脳は分かっているのだ。でも、分かっているも落ち着かせることができていない。

『無理かなあ……でもおちんちん、こんな小さな穴から出ようとするなんて可愛いね』

『可愛くないっ！ 皮が裂けるううう！』

『裂けるかな……でもそれってすごいよね。皮が裂ける痛みより、快感を求める力の方が強いってことだよ』

そんな変なところで感心しないでほしい。とにかく止めてほしい。せめて手を離してほしい。

『可愛い。勃起したくて頑張ってる。健気なおちんちん……』

『やだあっ！ お願いだからもう許してっ』

『……ダメだよ。タマタマにひどいことをしたお仕置きだよ。もう少し反省しようね』

『したっ！ もうしたからあっ！』

痛い。けれど感じたい。相反する気持ちを抱えたまま、それでも逃げることはできない。

『……すごくえっちな匂いにする』

『ひっ』

陰嚢を持たれたまま、スンスンと鼻先をペニスの先端に擦りつけられる。嗅がれている。すごい悪臭を放っているであろうそこを。

『すごいな……こっちはどうかな』

『やああっ！』

今度は陰嚢。それもペニスとの縫い目のところに鼻を差し込むようにして吸われてしまう。

『やだっ、やめてっ』

『……少し匂いがあるかな……こっちは洗えるから、今度から指先でもう少し念入りに洗おうか』

『やあああっ』

なんという辱めだろうか。陰部の匂いを嗅がれ、洗えない場所ならまだしも洗える場所を臭うと言われてしまうなんて。

『恥ずかしいよ。ここを洗っているのは俺だからね。俺がちゃんと洗えてなかっただけの話だよ』

『やっ……やだあ……ごめんなさい……』

確かに洗っているのは速水だけれど、やはりそれは何をどう言おうとも結局優也の身体の一部なのだ。確かに縫い目の部分は怖くて洗われるときに首を振ってしまうし、足にぎゅっと力が入ってしまうことも多い。それを知っているからこそ、速水は優しく撫でるように洗ってくれていただけなのだ。

『……ああ指よりもガーゼを使った方がいいかな。ボディタオルだと痛いだろうし、細かい部分だからと言って歯ブラシでも痛そうだ』

『ひっ、やあっ！』

もうしっかり縫い目はくっついている。けれどそこをそんな硬いもので洗われると思うと怖い。

『ごめんね、怖かったね。大丈夫、ちゃんと柔らかなガーゼで洗おう。赤ちゃんに使うようなやつを買う』

よ

『んっ……』

それならいい。赤ちゃん用ならかなり柔らかくて、肌を痛めるようなこともないはずだ。

『ゆっくり時間を掛けて洗おうね』

『うう……』

臭うなら洗ってほしい。でもそんな風に洗われたらきつと感じてしまう。そしたらまた痛くなってしまうし、もやもやした気持ちを引きずってしまう。

『ここはどうやって洗おうか』

『あっ』

舌先でまた先端を突かれた。

『こうして……舌で汚れを舐め取れるかな』

『やつ……！ なにっ、やつ、やだっ』

さすがにそれは、本当に止めてほしい。恥垢を舐め取るなんて。舐め清めるなんて。

『こら。暴れないの。もつとぎゅって握っちゃうよ』

『ひっ』

陰嚢を掴む手に力が入った。怖い。自分で傷付けておきながら、他人の手に痛めつけられるかもしれないと思うと身が竦む。

『大丈夫……暴れなければ痛くないよ。ほら』

『うん……』

怖い。でも恥ずかしくてきつとつい身体を引いてしまう。

『じゃあ、舌で綺麗にしてみようね。動いてはいけないよ』

『やだあ……ごめんなさい、やめて……』

『ダメ。大事なおちんちんなだからちゃんと綺麗にしておかないと』

陰嚢を人質に取られた状態。ソファの前で、股間だけを露出した状態でスーツ姿の速水に恥垢を舐められる。なんてことをしているのだろう——そう思うのに、本気では逃げることはできない。

(してほしい……)

本気で嫌だとは思っていない。だって、そんなことをしてくれる人なんてこの世に速水しかない。恥垢までも可愛がってくれる人なんて。

『んっ……』

舌がペニスに伸びた。包皮輪を抜げるようにチロチロと舌先で先端を擦られる。

『んあ、あっ、んっ』

『うん、美味しい。えつちな味がする。勃起しないのにカウパーが出てるのかな？ 濡れて来てるよ』

約5万文字。

2 回手術します。